

「青い煙」の意味

中野伸彦

The Meaning of “Aoi kemuri”

NAKANANO Nobuhiko

(Received September 27, 2019)

一 はじめに

次は、新美南吉の作品「ごん狐」の最後の部分である。¹⁾

ごんは、ぐつたりと目をつぶつたまゝ、うなづきました。

兵十は、火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出てあました。(『CD-ROM版赤い鳥』〈大空社〉復刊第三号 第一号27頁、昭和七年)

兵十の火縄銃からでている煙の色を「青い」と表現している。

この「青い」については、次にあげるように、現代語の「青い」の指すような色を指すものとしたうえで、なぜこのような「独特」の表現がされたかといった形で問題にされることが少なくない。²⁾

火なわじゅうのけむりが果たして「青い」のか、事実は知らないが、「青い」という鮮明な単色を用いている言語表現が、けむりの存在感を鮮やかに示すものとなっている。けむりが鮮明になるのに比例して、読者はごんの死をこの上なくはかなく思っていくのである。(中西一弘『文学言語を讀む Ⅰ巻 「ごんぎつね」―書く立場からのアプローチ』〈明治図書出版〉147頁、平成九年)

この「青いけむり」は授業のなかでも問題になることがあります。なぜ青いのか、青は何を意味するのか、というふうな。(中略) 「青いけむり」は、単なる「火なわじゅう」の硝煙の色ではありません。語り手に見えた

ものです。(小松善之助『教材「ごんぎつね」の文法』〈明治図書出版〉30頁、昭和六十三年)

「白いけむり」ではなく「青いけむり」など独特の表現があり、その表現の仕方でも物語のキーワードとなっているため取り上げる必要がある。(小林信次「ごんぎつね」の山場の模擬授業」〈「読み」の授業研究会HP (<http://www.yomiken.jp/>)に「運営委員の実践」の一つとして掲載〉、平成二十八年³⁾)

・通常の煙の色は灰色であり、ここでの煙も事実としては灰色だったはずである。

・しかし書き手は、敢えて煙の色を「青」と表現した。ここには書き手の意図がある。

・青は、「深い悲しみ」を表現する色であると、広く解されている。

・この解釈は、この場面にも当てはめることができる。「青いけむり」は何らかの悲しみを表現していると類推することが可能である。

・書き手は、ごんが撃たれた悲しみを「青いけむり」と描写した。書き手は、撃たれたごんを仕方ないというようには描いてはいない。(佐藤佐敏「解釈に影響を与えるテキスト内根拠」、『全国大学国語教育学会発表要旨集』百二十二号49頁、平成二十四年)

しかし、「ごん狐」は昭和初めの作品である。さして遠くない過去ではあるが、当時の言葉と現代の言葉の間に違いがないわけではない。「青い」の指す色も時代によって異なっている可能性もある。本稿では、近代の用例をもとに、「ごん狐」の「青い煙」がどのような色を表していたかを考えようとするものである。

二 近代における「青い煙」の用例

前節で引いたように、「青い煙」は「独特」の表現であるように述べられることがある。確かに、現代においてはあまり普通の表現ではないように思われるが、近代においては、煙の色を「青い」と言うことは決して珍しい表現ではない。

其朝は、私も早く起きて朝飯の用意をしました。台所の戸の開捨てた間から、秋の光がさしこんで、流許の手桶や亜鉛盥が輝つて見える。青い煙は媒けた窓から壁の外へ漏れる。(島崎藤村「旧主人」へ『藤村全集』第二卷(筑摩書房) 493頁、明治三十五年) * 「媒けた」は原文のまま

池かと思ふ程静止した堀割の水は、河岸通りに立つ格子戸つくりの二階屋から、向うに見える黒板塀の、古風な忍返しの影響までをはつきり映してゐる。丁度夕時であらう、泊つてゐる荷舟の苦屋根が、往來よりも高く持上つて、物を養う青い煙が、その蔭から、風のない空中へ真直に立昇つてゐる。(永井荷風「深川の唄」へ『荷風全集』第六卷(岩波書店) 110頁、明治四十二年)

お品は竈の前へ腰を掛けた。白い鶏は掛梯子の代に掛けてある荒縄でぐるぐる捲にした竹の幹へ各自に爪を引つ掛けて両方の羽を拡げて身体の平均を保ちながら慌てたやうに疇へあがつたさうして青い煙の中に凝然として目を閉ぢて居る。(長塚節「土」へ『新選名著復刻全集近代文学館』(日本近代文学館) 6頁、明治四十五年)

正午にはまだ間があるうちに午餐の支度を急いでおつぎは田圃から茶を沸しにのぼる。与吉は悦んでおつぎの背に嘔りついた。勸次は後で獨り耕した。青い煙が檜の木から立つて馳て「沸いたぞう」とおつぎの声で喚ばれるまでは勸次は忙しい其の手を止めなかつた。(前に同じ、81頁)

昼餐の後や手の冷たく成つた時などには彼はそこらの木を聚めて燃やす。木の根が燻ぶつていつでも青い煙が少しづつ立つて居る。(前に同じ、101頁)

勸次は麦藁を一握み軒端へ投げて、刈つた青草をそれへ打つ掛けて、燐寸の火を点けてさうして抑へつけた。ぶすくくと燻る煙が蚊を遠く散乱せしめる。ぼつと焰が立つて燃えあがれば水を打つた。彼等は目鼻にしみる青い煙の中に裸體の儘凝然として居る。(前に同じ、190頁)

自分は其所にあつた巻蓆入から煙草を一本取り出して燐寸の火を擦つた。さうして自分の鼻から出る青い煙と兄の顔とを等分に眺めてゐた。(夏目漱石「行人」へ『漱石全集』第八卷(岩波書店) 266頁、大正元々二年)

此時北船場の方角は、もう騒動が済んでから暫く立つたので、焼けた家の址から青い煙が立ち昇つてゐるだけである。(森鷗外「大塩平八郎」へ『鷗外全集』第十五卷(岩波書店) 38頁、大正三年)

場主は真黒な大きな巻煙草のやうなものを口に銜へて青い煙をほがらかに吹いてゐた。そこからは氣息づまるやうな不快な匂が彼れの鼻の奥をつんく刺戟した。(有島武郎「カインの末裔」へ『有島武郎全集』第三卷(筑摩書房) 125頁、大正六年)

彼方の隅に五つ並べて築かれた急造の石の大竈からは、晴れた空に熾な陽炎を立てながら、淡い青い煙と麦の堅焼パンのやける香ばしい匂が漂つて来た。(宮本百合子「古き小画」へ『宮本百合子全集』第二卷(新日本出版社) 366頁、大正十三年)

僕は一杯のコーヒーを啜り、ふだんのやうに巻煙草をふかし出した。巻煙草の煙は薔薇色の壁へかすかに青い煙を立ちのぼらせて行つた。(芥川龍之介「齒車」へ『芥川龍之介全集』第十五卷(岩波書店) 59頁、昭和二年)

あゝ、けふは家はみんな留守かもしれないな、こまつたなとおもひました。それでいそいで家のまへまで来ますと、窓から、青いけむりが出てゐますおゝ、だれかゐるよと、安心してはいり、

「たゞいま。」と元氣よく言つて、だいじにもつてゐたポウトを上り口のところへおきました。すると、土間の方から、

「兄ちゃん。」と秀子があつて来ました。(略)

「あのね、これが、カバンをかけるところに、はつてあつたの。」とわたししました。見るとお母さんの字で、三年の秀子にもわかるやうに、

「五じに、おちやをもつてきてください。やまだのむぎばたけにゐます。」とかいてありました。

「もう湯をわかした?」

「うんう。今火をたきつけたところ。」（藤川貞之助「麦をかるころ」
 へ〈『CD-ROM版赤い鳥』（大空社）〉復刊第二巻第二号55頁、昭和六年）

青い煙の細くなびく、蠟燭の香の沁む裡に（泉鏡花「燈明之巻」へ『鏡
 花全集』巻二十三（岩波書店）〉714頁、昭和八年）

あの細長い煙突は、桃の湯といふ銭湯屋のものであるが、青い煙を風のな
 がれるままにおとなしく北方へなびかせてゐる。（大宰治「彼は昔の彼な
 らず」へ『大宰治全集』2（筑摩書房）〉203頁、昭和九年）

正木博士は暖気をしながら反り返った。スリッパをはいたまま椅子の上に
 乗って、両膝を抱えるとクルリと南側を向いて、頭の中を整理するよう
 に眼を半開にして窓の光を透かしながら、ホッカリと青い煙を吐いた。（夢
 野久作「ドグラ・マグラ」へ『日本探偵小説全集』4（創元推理文庫）〉
 620頁、昭和十年）

見ると賊の胸につきつけられたピストルのつつ口からは、まだうす青い
 けむりがたちのぼっています。（江戸川乱歩「怪人二十面相」へ『江戸川
 乱歩全集』第二十三巻（講談社）〉37頁、昭和十一年）

沢田は運転手台に上ると、ぶるぶると、エンジンをかけ、トラックは老ほ
 れた車体をゆすぶり、青い煙を尻からはいて、小屋を出た。（火野葦平
 「糞尿譚」へ『芥川賞全集』第二巻（文藝春秋）〉30頁、昭和十二年）

赤瀬春吉の家の前まで来ると、トラックを止め、彦太郎が下りると、海員
 児童ホームが先ですね、と沢田は訊いて、彦太郎が頷くと、トラックは青
 い煙を残して行ってしまった。（前に同じ、30頁）

彼は岩に腰かけて煙管を啜え、青い煙を吐きながら高倉祐吉を見つめ
 だすのである。（本庄陸男「石狩川」へ『本庄陸男全集』第一巻（影書
 房）〉215頁、昭和十三〜十四年）

あのときはまっ暗な密林であったが、今ではひらけた原野のなかにぼつり
 ぼつりと農村が見えてゐた。棟のあたりに青い煙を棚曳かしてゐた。人が
 棲みついて炊いでゐることを語つてゐるのだ。（前に同じ、246頁）

「ふーん、」と彼は独り感心した。これが煙草の味といふものであらう―
 ―あをい煙が糸をまいてゐるきせるを、指に立て、眺め入るのだ。（前に
 同じ、327頁）

煮炊きする煙、たき火の煙、たばこの煙、自動車の排気する煙など、煙の種
 類はさまざまであるが、普通に使われている表現であり、また、「悲しみ」の

ような情緒と特に結びついているわけでもない。具体的に、どのような色かはわ
 かりにくいところもあるが、次のように、「白い煙」や「黒い煙」と並んで用
 いられた例から考えるに、白でも黒でもない、灰色の煙を指しているものと推
 測される。

右の手を左の袂に入れてゴソ／＼やつて居たが、やがて「朝日」を一本
 取り出して口に啣へた。今度はマツチを出したが箱が半分壊れて中身は僅
 に五六本しか無い。生憎に二本摺り損なつて三本目で漸と火が点いた。

スパリ／＼と如何にも旨さうである。青い煙、白い煙、眼の先に透明に
 光つて、渦を巻いて消ゆく。（国木田独歩「二老人」へ『定本国木田独歩全
 集』第四巻（学習研究社）〉157頁、明治四十一年）

それから彼女の赤い煙突は毎日煙をあげつづけた。三すじの青い煙や黒
 い煙が雪の中を勢よく流れて行つた。（渡辺温「赤い煙突」へ『アンドロ
 ギュノスの裔』（創元推理文庫）〉85頁、昭和二年）

お城の中に、何かお祝事があつて、台所でお馳走が作られる時には、青い
 けむりが台所の中にもうすいもやの様にみちて、女の人々がその中で御馳走
 を作るのでした。（新美南吉「煙の好きな若君の話」へ『校定新美南吉全
 集』第十巻（大日本図書）〉291頁、昭和五年）

甚左は、町をどんどん行くと、ある家の格子から、青い煙が路へながれで
 てゐました。魚をやくにほひもしてゐました。（前に同じ、298頁）

白い煙はお寺の庭からのぼつてゐました。
 甚左は馬からおりてそこへ行くと、一人の老とつた寺男が落葉をかきあつ
 めてもやしてゐました。（前に同じ、293頁）

松林がこんもり茂つてゐる丘の向ふから黒い煙がうすくなつて、紫色にな
 つてゐました。甚左は、或百姓家の背戸で、齒におはぐるをつけてる若い
 お嫁さんにあの煙は何かと訊ねました。

若いお嫁さんは、黒い歯を見せて、瓦屋の煙だと云ひました。（前に同じ、
 296頁）

日本語の「青」が指すものは、元来、現代語の「青」の指すものとは異なつ
 ていたのではないかということについては、
 アヲにしたところで、必ずしも《青》ではなく、もつと漠然とした状態に
 あつたかも知れないことは、これがとかく「白」の意味領域に割り込みや
 すい傍ら、「黒」の方にも接近しやすい傾向を有する点から想像してみても
 良い。（略）アヲの原義も朦朧な《Pale蒼白》といった辺りに落ちる

ものであつたと再建して見るのである。これは明るい側から見て「ほの明るさ」、暗い側から見て「うす暗さ」、つまり「漠」の概念である。(佐竹昭広「古代日本語に於ける色名の性格」へ『国語国文』第二十四卷第六号)15頁、昭和三十年)

本来、アオは、ぼんやりした色調をさす語であり、現代語でも、その延長として、さえない顔色をさす用法などが残っている。(小松英雄『日本語の歴史』(笠間書院)187頁、平成十三年) *傍線は原文に付されているもの

のように、すでに指摘されているところであるが、近代においても、「煙」で言えば、白でも黒でもない中間領域である灰色を「青い」で指すことがあつたと考えられるのである。⁵⁾

三 近代における「青い雲」「青い夕闇」の用例

「青い」が灰色を指していると推測される近代の用例として、「煙」以外にも、「青い雲」の例をあげることができる。「白い雲」や「紫の雲」「紅い雲」と並んで使われているが、これも灰色を表していると考えられる。

青い雲がながれて、虫がなくて、私が笑って、貴方が笑って、人が笑って……、アラアラ、鳥が飛ぶ、私達の心のようにネエ(宮本百合子「錦木」へ『宮本百合子全集』補巻一(新日本出版社)210頁、大正元々二年)

夕暮が四方に罩め、青い世界地図のやうな雲が地平に垂れてゐた。草の葉ばかりに風の吹いてゐる平野の中で、彼は高い声で母を呼んでゐた。(三好達治「笹」へ『三好達治全集』1(筑摩書房)11頁、昭和二年)

夕暮が四方に罩め、青い雲が地平に垂れてゐた。(前に同じ、12頁)

少年は柳に、少女は雪と鸚鵡に、そして女乞食は亀に、春、みんな憑かれてしまつた。夏、青い雲、白い雲、国立銀行では古い紙幣を焼いた。秋になると遠くで祭りの太鼓が鳴り、日の暮の渚で鵜が吃逆をする。冬、やがて島の人人は、指が蜻蛉になつて飛んでゆかないやうに、みんな日向でふところ手をする。(三好達治「島国」へ『三好達治全集』1(筑摩書房)113頁、昭和二年)

どうぞ もう一度 帰つておくれ
青い雲のながれてゐた日

あの昼の星のちらついてゐた日……(立原道造「夏花の歌」へ『立原道造全集』第三卷(角川書店)23頁、昭和十二年)

あの柘榴の花の散つた中へ、鬼子母神様の雲だといつて、草履を脱いで坐つたのも、つい近頃のやうですもの。お母さんにつれられて。白い雲、青い雲、紫の雲は何様でしょう。鬼子母神様は紅い雲のやうに思はれますね。(泉鏡花「縷紅新草」へ『鏡花全集』巻二十四(岩波書店)688頁、昭和十四年)

また、次の「青い夕闇」は、灰色ではないであろうが、昼の明るい時と夜まっ暗になつた時との中間領域の「闇」の色を表したものと考えられる。

日が暮れて青い夕闇の中を人々がほの白くあちこちする頃、人力車は大野の町にはいつた。(新美南吉「おぢいさんのランプ」へ『校定新美南吉全集』第二卷(大日本図書)169頁、昭和十七年)

四、五人の侍が飛びだして、青い夕闇をすかしているやうな眼ざし。(吉川英治「鳴門秘帖」へ『吉川英治全集』3(講談社)289頁、大正十五、昭和二年)

四 おわりに

「はじめに」で述べたように、「ごん狐」の「青い煙」については、現代語の「青い」の指すやうな色を指すものとして、そういう「独特」な表現を用いたのはなぜかという形で問題にされることが多いのであるが、述べてきたやうに、近代において、「ごん狐」に用いられている「青い煙」という表現は、「独特」な表現であるとは言えない。ことばで色をどのやうに分けるかについては、言語によって異なることがあるやうに⁶⁾、時代によつても異なることがあり、近代のやうな近い時代の日本語と現代の日本語でも異なるところがあろう。⁷⁾

「ごん狐」のこの個所は、むしろ、そうした、ことばによる色の分け方の複数性について学ぶべきところではないかと思う。

注

(1) 新美南吉の草稿「権狐」でも、「まだ青い煙が、銃口から細く出てゐました。」(『新編新美南吉代表作集』(半田市教育委員会)31頁、昭和六年)となつており、やはり「青い煙」と書かれている。なお、「ごん狐」の作品名の表記については、以下、『赤い鳥』に掲載された際の「ごん狐」による。また、以下、用例の引用に際しては、振り仮名を省いている。

(2) 次のように、「煙」について言及しても、特に「青い」を「独特」な表現として取り立てていないものもある。

つつ口から立ちのぼる青いけむりの美しさは、なぜか、ごんと兵十というこの悲劇の主人公たちにささげられた手向けの香華であるかのように思えてくるではありませんか。(西郷竹彦『教師のための文芸学入門』〈明治図書出版〉173頁、昭和四十三年)

撃つてすぐなので、煙が出る。しかし、その煙がごんの死を弔うための線香の煙のような感じをもつ。(略)下へ下へと下降していた視線が初めて青いけむりになって上昇する。線香の煙を暗示している。(甲斐睦郎「ごんぎつね」の表現)〈『実践国語研究別冊』百三十九号〉47頁、平成六年)

(3) 授業の受講生の行った模擬授業の指導案も紹介されており、その中でも、「青いけむり」の意味を考える「学習過程での教師の発問として、「実際に青い煙を見たことがありますか?」「では青くて細い煙とは何を表していると思いますか?」といったことがあげられている(後者の発問への「児童の反応」としては、「兵十の悲しい気持ち」「後悔している気持ち」「ごんの魂」があげられている)。

(4) 「青い煙」の用例の採取にあたっては、次のようなデータベースを利用した。

・ 青空文庫 <https://www.aozora-gr.jp/>
 ・ 用例: j a yourci.jp/

(5) 煙の色を「青い」で表現することは、次のように、比較的新しい時代の用例も見られ、現代でも「灰色」を指すことはあるというべきかもしれない(ただし、自分では用いない用法であり、現代では用いないという判断をする向きも多いかと思われる)。

お鹿さんが縁側に蚊遣を焚いて置いてくれた。その薄青い煙が太郎の方に靡いて来る。(福永武彦「夢みる少年の昼と夜」)〈『夢みる少年の昼と夜』(新潮文庫)〉39頁、昭和二十九年)

三原は、すぐに返事をせずに、煙草をとり出して、鳥飼にすすめた。ライターを鳴らして火をつけてやり、自分も一本口にくわえて、ゆっくりと青い煙を吐いた。(松本清張「点と線」)〈『新潮文庫』78頁、昭和三十三年)

デパートを出たあと、はずみも手伝ったのだから、つづけてもう

一つ、小さな冒険を重ねてみることにした。といっても、大したことはできない、繁華街の外れの奥まった路地にある、小さな朝鮮料理屋に立ち寄ってみただけのことである。(略)

青い煙が立ちこめていた。古ぼけた換気扇が騒がしい音をたてていた。(安部公房「他人の顔」)〈『新潮文庫』133頁、昭和三十九年) 噴出する蒸気の濃霧のなかで鋼板を踏んづける熟練工は足もとから青い煙をたてて燃えていた。(開高健「青い月曜日」)〈『文春文庫』231頁、昭和四十四年)

線香の束を半分にして火を点けると、青い煙が墓地の方へ秋口の雲のようにくっきりと流れていって、楓の太い幹に巻きつくのが見えた。(三浦哲郎「海峡」)〈『愁月記』(新潮文庫)〉129頁、昭和六十二年)

私は目をそらし、吸い殻がくすぶっている灰皿を眺めた。青い煙がゆらゆらと立ち昇っていた。(宮部みゆき「龍は眠る」)〈『新潮文庫』192頁、平成三年)

窓の外に雑誌をほうり投げて、もう二十本目にもなるタバコに火をつけた。そして、ふうっと青い煙をはき、小さくせき込んだ。(大槻ケンジ「新興宗教オモイデ教」)〈『角川文庫』165頁、平成四年)

枝を透かして陽の光が柔かく庭に降りそそいでいた。たき火の薄青い煙がそれに逆らうように昇っていた。(宇江佐真理「幻の声 髪結び伊三次捕物余話」)〈『文春文庫』158頁、平成九年)

土曜日の午後になると、決まってドドがわが家にやってきた、(略) やってくると言っても、十五分か三十分そこら、木苺のジュースを溶いたコップ一杯の水を前に腰を下ろし、膝のあいだに支えたステッキの骨作りの握りに顎を預けて夢想したり、巻たばこの煙を青くなびかせて物思いに耽りにくるだけだ。(ブルーノ・シュルツ)〈『工藤幸雄訳』「ドド」)〈『シュルツ全小説』(平凡社ライブラリー)〉353頁、平成十年)

ぼくは仏壇をおおき見る。千秋の写真が冷淡な目でぼくを見返してくる。タネ子がみかんの無事でも祈ったのか、線香が薄青く煙をのぼらせている。花瓶には中輪の菊が黄色くあふれ、秋蠅が一匹、花瓶の前を歩いていく。(樋口有介「魔女」)〈『文春文庫』312頁、平成

十三年)

ワタルは印を結んで聖堂のなかに忍び込むと、礼拝堂のいちばん後ろにある、大燭台の列の後ろに身を潜めた。燭台に立てられた無数の蠟燭の炎が、青い煙を立ちのぼらせながら、ゆらゆらと揺れている。(宮部みゆき「ブレイブ・ストーリー」〈角川書店〉下227頁、平成十五年)

なお、「灰色」ではないが、血の気のやや引いた中間的な顔色(血色のよい状態とまったく血の気のなくなった状態の間)を表す「青い顔」のような言い方は、先の引用の中で小松英雄氏が述べられている通り、現代でも普通に用いられる用法であろう。

(6) 鈴木孝夫『日本語と外国語』(岩波新書、平成二年)、今井むつみ『ことばと思考』(岩波新書、平成二十二年)など。

(7) たとえば、次の例の「黄色」は、現代であれば、「茶色」にあたる色を指していると思われる。

娘の糸子は細い袂の中から一通の黄色い封筒を取りだして、父親の前にさしだした。(海野十三「蠅男」〈大衆文学館 文庫コレクシヨン(講談社)〉40頁、昭和十二年)

濡れしよぼれた黄色いトラ猫がよちよちと、みじめな毛並をわたしの膝に擦りよせてくるのだった。(大坪砂男「蟋蟀の歌」〈『大坪砂男全集4 零人』(創元推理文庫)〉215頁、昭和二十八年)

ただし、現代でも、同様な例が見られないわけではない(これも自分では用いない用法であるが)。

夜、こっそりベランダに出てバケツの陰に隠して置いた靴を見ると、こびりついた泥が皮全体を黄色くぼりぼりした化石に変質させていた。(多和田葉子「雪の練習生」〈新潮文庫〉160頁、平成二十三年)

縦長のうす黄色の封筒に、宛て名はくろぐろと墨で書かれ、宛て名は「都様 陵様」と連名になっていた。(川上弘美「水声」〈文春文庫〉151頁、平成二十六年)